

氏名	方敏
学位の種類	博士（国際日本研究）
学位記番号	博甲第10173号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日本人大学生による初対面以降の会話における話題選択と話題導入の研究

主査	筑波大学 准教授 博士（言語学）	関崎博紀
副査	筑波大学 准教授 Ph.D. in Linguistic Anthropology	井出里咲子
副査	筑波大学 准教授	木戸光子

論文の要旨

本論文は、親しさの程度の浅い相手と良好な人間関係を構築、維持していく様相を解明し、その成果を日本語教育に還元することを目指して、初対面以降の会話において日本語母語話者が「何について」「どのように」話すのかを分析するものである。先行研究では、初対面会話については盛んに分析されている一方、二回目以降の会話、とりわけそこでの話題の選択と移行については、初対面とは異なる難しさが指摘されつつも、ほとんど分析されていない。そこで本論文では以下の5つの研究課題を設け、1～8章で論じている。

課題1：どのような話題が選択されるか解明する。

課題2：どのように話題が選択されるか解明する。

課題3：質問文による話題導入がどのような場合にどのように行われるか解明する。

課題4：平叙文による話題導入がどのような場合にどのように行われるか解明する。

課題5：独話的発話による話題導入がどのような場合にどのように行われるか解明する。

第1章では、本研究の位置づけが行われている。先行研究では初対面会話が盛んに研究されてきた一方で、二回目以降の会話に関しては研究が限定的であることが示されている。そして、従来の研究での「話題内容」と「話題導入方法」が分析の重要な観点になることが述べられている。

第2章では、本研究の方法が説明されている。本研究では、日本語母語話者同士による初対面から四回目までの会話を5組分析すること、回ごとの変化を量的、質的に解明するために談話分析と会話分析の手法を併用することが示されている。そして、データ整備として、話題、話題導入部、話題導入発話のそれぞれを操作的に定義した上で認定し、その結果の信頼性が確かめられたことが説明されている。

第3章では、二回目以降の会話で選択される話題の特徴を明らかにするため、会話の回ごとの話題選択肢リストを作成したうえで、初対面会話における話題との異同を分析している。分析の結果、二回目以降の会話では、初対面と比べて多様な話題が選択されているものの、それらは14種類の話題カテゴリーにまとめられる点では話題選択スキーマの存在が示唆されている。そこには、初対面会話で回避される「家族」「外見」などのプライバシーにかかわる話題が見られることも示されている。さらに、二回目以降の会話では、最後に、初対面会話と同一の話題で、客観的な情報の交換にとどまらず、話者の考えや評価が開示されるなど、踏み込み方が異なることも指摘されている。

第4章では、話題の選択源と、直前の話題との関連という観点から二回目以降の会話での話題選択の型を分析している。分析の結果、情報交換を優先し、直前の話題に関連のない「新出型」が多用される初対面会話と異なり、二回目以降の会話では「新出型」が減少し、「再生型」の使用が増加することが示されている。また、各話題は直前の話題に誘発されることが多いこと、プライバシーに関する話題も直前の話題に関連づけて導入されていることが示されている。さらに、プライバシーに関する話題について、選択に特に慎重さが求められるものとして分析した結果、聞き手領域への踏み込みを緩和する表現が用いられたり、文脈を示すメタ表現によって話題転換の唐突さが軽減されたりすることが示されている。

第5章では、話題導入と、文の種類に反映される発話者の配慮や発話意図との関連を探るため、まず質問文による話題導入を分析している。分析の結果、質問文による話題導入の数は初対面で多いこと、二回目以降の会話で減少すること、「外見」「金銭」などプライバシーに踏み込むものも質問文で導入されることが示されている。次に、相手に返答を求める質問文での話題導入による押しつけがましさを調整するためのストラテジーについても分析されている。その結果、初対面会話では、候補となる話題が相手に受け入れられるように、話題導入の理由を付加して選択の正当性が示されることや、二回目以降の会話で相手が候補となる話題への否定的な反応を示した場合には、話題導入者が相手の反応に同調し、共感的に会話を促進するストラテジーを用いることなどが明らかにされている。

第6章では、平叙文による話題導入について、その数量的傾向と導入される話題の内容、付随するストラテジーという観点から分析が行われている。分析の結果として、平叙文による話題導入は、研究課題3で示した質問文と正反対の傾向を示し、初対面会話では使用数が少なく、二回目以降の会話では増加することが示されている。次に、平叙文で導入される話題内容については、初対面会話では、話し相手との共通点に関する客観的な情報交換にとどまるのに対し、二回目以降の会話では、相手に同感を求めるための意見や考えの表出が多くなることが示されている。最後に、平叙文での話題を導入では、会話の回数に関わらず、話題間の一貫性を保つストラテジーとして、話題導入者が、直前の話題で言及された語をそのまま引用したり、助詞「も」を使用したりして直前の話題との関連づけを行っていることが示されている。

第7章では、独話的発話による話題導入に関して、その数量的傾向と導入される話題の内容、聞き手との相互行為という観点から分析が行われている。分析の結果、まず、独話的発話による話題導入の頻度は、全体的に低いですが、初対面会話と比べると二回目以降の会話では高くなり、過半数の組で使用されていることが示されている。二回目以降の会話で独話的発話によって開始される話題は、「問題の思案」と「感情・感覚の表出」に大別されている。これがいかにして会話の話題として展開するか、またはしないのかを探るために、独話的発話に対する聞き手の反応を検証し、聞き手は笑いのみで反応して聞き流す場合があること、聞き手が実質的な言語表現で話題への関心や共感を示し、話題として展開する場合があることなどが明らかにされている。また、独話的発話による話題導入の効果について、聞き手への親近感を示すと同時に話題導入に伴う働きかけを軽減する機能があると論じられている。

第8章にあたる終章では、以上の結果を踏まえ、初対面とは異なる配慮が確認された二回目以降の会話について今後も研究が拡大することが、いわゆる二度見知りに対する不安を軽減するのに必要であることが論じられている。また、本研究の結果は、日本語学習者にとっては暗黙の了解とも言える社会言語学的規範を具現化したものであり、日本語学習者による自然な言語運用に不可欠な情報となることが論じられている。

審査の要旨

1 批評

人が知り合ってから対人関係を築いていく様相を日本語教育で扱うためには、初対面から継続したデータ収集と分析が不可欠である。方氏はこの視点から、従来の研究の対象が初対面、または既に親しい関係

を築いている友人同士の会話に偏っている状況を批判的に捉え、初対面会話の横断的調査に比べて多大な労力を要する継続調査を完遂している。収集した会話は、5組の日本語母語話者に対して4回分で、計20件、459分に及ぶ。この会話の言語的、パラ言語的情報を全て文字化したうえで、互いを知って関係を築いていくのに最も中心的な関心事である話題について、操作的定義による話題の認定と区分を施し、その内容と導入の方法、及び、付随するストラテジーという観点から分析している。まず、話題の内容に関して、初対面の会話における話題選択スキーマという先行研究の知見を取り込みつつ、二回目以降の会話でも、取り上げられる話題の内容は広がりつつも緩やかな共通性があるという新たな知見を示すことに成功している。この知見は、今後の他言語との異同の解明、及び、その結果に基づく異文化間コミュニケーションでのギャップを予見する基礎となる。次に、各話題を導入する発話の文の種類を取り上げている。話題の内容とは一見、関係が薄いように思われるが、会話で何らかの事柄を取り上げようと発話する際に直面するのが、例えば当該の事柄について明示的に質問するか、希望的に述べて相手の開示を引き出すか、または発話者自身の話として開示するかなど、取り上げ方の問題である。方氏は、実際の会話で直面するこの関心事に忠実に研究課題を設定し、回を重ねるごとの会話での話題の導入について分析している。そして、初対面では質問文が多いという直感に沿った結果にとどまらず、押しつけがましさを減ずるためのストラテジーが利用されていること、二回目以降の会話では質問文に代わって平叙文による話題導入が増加すること、そのために生じうる唐突さを軽減するために関連づけストラテジーが用いられること、独話的発話によって話題として確立する否かを聞き手に委ねる方法があることなどを実証的に示している。文の機能を対人関係の変化との関連で指摘したこの知見は、言語学に対する貢献と認めうる。

一方、本論文には、課題も残されている。操作的定義による話題認定の結果として会話参加者自身の視点を取り込みきれていない点、話題導入に唐突さを感じさせない言語使用についての詳細な分析が残されている点などである。また、知り合いによるデータを扱っている故に、適度な距離感を保つための言語使用という観点からの分析も可能である。

上記の問題については方氏も認めており、継続的な研究活動に意欲を見せている。既に同じ条件で中国語母語話者同士による会話も収集していることから、残された課題を踏まえて、今後の飛躍的な活躍が期待される。

2 最終試験

令和4年1月26日、人文社会科学研究所科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（国際日本研究）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。